

2023年7月30日 主日礼拝

説教題「ミニストリーとは？」ルカによる福音書 10 章 25～37 節

主任牧師 加藤 誠

**「律法の専門家は言った。『その人を助けた人です。』そこで、イエスは言われた。『行って、あなたも同じようにしなさい。』」(ルカによる福音書10章37節)。**

教会の使命と働きをあらわす言葉に「ミッション」という言葉と「ミニストリー」という言葉があります。例えば、アメリカの教会のホームページを見ると必ず冒頭に「私たちのミッション」「私たちのミニストリー」が掲げられていて、自分たちの教会が何を目指し、どんな働きをしているのかが簡潔な言葉で示されています。「ミッション」は教会の使命です。「イエス・キリストを伝える」「この世界のただ中で、時が良くても悪くても礼拝をささげ続ける」などを教会の使命としてあげることができるでしょう。その使命を実現するために教会が取り組む働きを「ミニストリー」と呼びます。「礼拝」「音楽」「教育」「伝道」「奉仕」など、教会はさまざまな「ミニストリー」の可能性をいただいています。今朝は教会が「ミニストリー」に取り組む時に必ず問われる課題について考えてみたいと思います。

今から 28 年前の阪神淡路大震災において、バプテスト連盟の教会はさまざまな支援活動に導かれましたが、その時に「聖書配布を巡る論争」が起きました。神戸の中でも被災の激しかった長田区の水笠公園で炊き出しをした際、宣教師の先生方が「炊き出しと一緒に新約聖書を配りたい」と言われました。「私たちの本分は御言葉を伝えることにある。御言葉を伝えないならただのボランティアと同じだ」と。話し合いを重ねる中で、結論としては「炊き出しと一緒に聖書は配らない」という結論に導かれました。温かい食事を必要としている人の立場を考えると、ご飯と引き換えに聖書を手渡すのは「伝道」ではなく「取り引き」になってしまう…と考えたのです。相手の方がキリスト教について、聖書について聴きたいと言われたら大いに語らせていただくけれども、「支援する側」「支援を受ける側」という立場が明確な場面において「支援する側」が「支援物資」と一緒に御言葉を配るのは「押し付け」になる…と考えたのです。

このような時、わたしの中にいつも思い起される岩村昇先生の話があります。岩村先生は今から約 60 年前にネパールに医療宣教師として派遣された方です。岩村先生が派遣されて一年後のクリスマスに、各国から派遣されたクリスチャン医療従事者たちを前にリンデル総主事という方がこう語りかけたそうです。「皆さんはこの一年、何万という病めるネパールの方々と医療を通して交わってこられたけれども、その中から一人の…」と言われたので、岩村先生ははっきり「一人のクリスチャンを得たか」と問われると思ったら、リンデル総主事は「一人の友をえましたか？」と問われた。「友とは、あなたが悩みを聞いてあげるだけでなく、あなたの悩みを聞いてもらえる友である。そのような心友を得たか」と。そこにいたクリスチャンワーカーたちが黙っていると、リンデル総幹事は「皆さんは何もできなかつ

たのですねえ」と厳しく言われた、という話です。

確かにクリスチャンにとって、イエス・キリストの御言葉を伝えることは第一の「ミッション（使命）」です。が、どのような姿勢、スタンスで御言葉を伝え、ミニストリーに仕えるのかは、御言葉を伝えると同様に非常に大切な課題なのです。リンデル総幹事が教えようとされたのは、医療を必要とするネパールの人々を前に、少しでも「自分は上に立っている＝教える立場、伝える立場にいる」という思いがあるなら「御言葉を伝える資格はない」ということでしょう。ネパールの人と「人として同じ地平に立つ」。自らも弱さを持ち、苦悩や困難を抱えている「同じ人として立つ」。なぜならイエス・キリストがそうであったからです。神の御言葉を伝えるのに、主イエスは弱っている人々の「上に立って」教えられませんでした。弱っている人々とどこまでも「同じ地平」に立ち、苦悩と涙を分かち合う中で御言葉を語り、最期は十字架につけられていられました。十字架を前に不安と恐れに襲われた時、主イエスは弟子たちに「一緒に祈ってほしい」と頼んでいます。どこまでも人々と同じ地平に立たれた主イエスを通してこそ、神の命の言は伝えられました。それゆえ、主イエスの御言葉のミッションに仕える者は、「上に立つ」のではなく「同じ地平に立つ」ことを厳しく求められているのです。

今朝は聖書箇所として有名な「善きサマリア人のたとえ」の箇所を選ばせていただきました。このお話は「目の前で倒れている人、困窮している人を避けてしまうのではなく、手を差し伸べて親切にしてください」という「隣人愛」の勧めとして語られることが多いのですが、「それだけ」なら、実は他の宗教でも学校の道徳でも語られていることとあまり変わりありません。大切なポイントは、ここで主イエスに質問した律法の専門家に、主イエスは「根本的な方向転換」を迫っているということです。一つは「すでに先生になってしまっているあなたは、一度、生徒の立場になる必要があるね」ということです。あなたは確かに聖書の正しい理解を知っている。けれども、あなたには目の前で倒れている人を助ける愛を持ち合わせているか。なんと貧しい愛しか持ち合わせていない自分の姿を知っているか。あなたが軽蔑しているサマリア人に学ぶ必要がある。あなたは先生ではなく、生徒になりなさい…と迫られているということです。もう一つは「あなたはいつも自分を『助ける側』に置いている。『誰を助けるべきで、誰なら助けなくてもよいのか』を定義しようとしている。でも一度『助けを必要としている側』に身を置いてみたらどうだ？倒れた者にとってはどういう助けや、どういう一言がうれしいか。日常生活の現場で一度よく考えたみたらいい」と。

聖書を学ぶことは大切です。ただ聖書の知識は、日常生活において神を愛し、隣り人を愛することに用いられて初めて意味があります。その時に「先生ではなく生徒の立場に」、また「助ける側ではなく助けられる側に」身を置いて、神と人ともに学び続けていく。そのような姿勢において、私たちは「イエス・キリストの御言葉を伝える／分かち合う」というミニストリーを担う者とされていくのです。